

モノと情報班

ラオスにおける竹箴の商品連鎖と竹の利用

田口理恵（東海大学海洋学部）

キーワード：商品連鎖、竹箴、竹の商品化

調査期間：2005 年 8 月 2~17 日、ピエンチャン（ノンサヴァン村）
2006 年 2 月 14~26 日、ピエンチャン（ノンサヴァン村、サントン郡、ボンホン郡）

The commodity chains of bamboo reed and consumption of bamboo in Laos

TAGUCHI, Rie (The School of Marine and Technology, Tokai University)

Keywords: commodity chains, *fuum*, commodification of bamboo

Research Period and Site: 10-17 Aug. 2005, Ban Nonsavang (Xaisettha District), Vientiane
9-19 Feb..2006, Ban Nonsavang & Santhong District, Phonhong District, Vientiane

要旨

本報告では、竹（マイ・パイ・パーン mai phai par : *bambusa arundiana* var. *spinosa* Retz）を利用する現場を取り上げ、竹箴の商品連鎖でつながる各生産現場（箴作り、箴販売、竹材販売、竹材の伐採）それぞれにおける、人々と竹との関わりについて述べている。

竹箴作りの現場となるのがピエンチャン近郊ノンサヴァン村である。ノンサヴァン村では、箴作りに従事している住人たちについて、それぞれの世帯が担う活動内容や、ノンサヴァンへの移入と技術習得の経緯などを調査し、箴作りを通じた住民同士の複雑な関係を記述している。

ノンサヴァン製箴は、おもにピエンチャンの公設市場にある機料店に卸され、市場から市内、地方から来た織物生産者に売られていく。今年度の調査では、市場内の 2 軒の機料店に 2005 年 8 月から 2006 年 2 月の半年の間、店頭販売された箴の記録付けを依頼した。その事業日誌をもとに、ノンサヴァン製箴の流通や需要動向を紹介している。

竹箴作りに利用されるマイ・パイ・パーン（mai phai par : *bambusa arundiana* var. *spinosa* Retz）の流通および消費の概況として、ピエンチャン市内にある竹材の集積地と、そこでの竹売買の状況を述べ、さらに都市部にマイ・パイ・パーンを供給する竹の伐採地の状況をまとめている。伐採地については、竹材を竹筏にしてメコン川で運んでくるサントン郡と、陸路で竹材・竹製品を運んでくる 13 号線沿道（プーパナン山 Phou phanag 付近の）地域とを分けて、伐採地における住民と竹との関わりについて述べている。

マイ・パイ・パーンを伐採・販売する、あるいは加工生産、製品の販売など、それぞれのサイトに見る竹を商品化する営みは、どれもが小規模な経済活動といえることができる。その一方で、それらを集積して全体として考えれば、都市がいかにたくさんの竹を多様なルートで入手し、消費しているかがわかる。都市による竹の消費と市場の拡大は、個々のサイトでの人々による対応の多様性そのものを生み出している。

1. はじめに

本研究の目的は、織機部品である箴（フォーム *fuum*）の商品連鎖 commodity chain に注目し、竹箴作りの現場から、材料となる竹の伐採、加工・利用、箴という製品の流通・消費まで、箴作りに関連する事象の調査を通して、1）竹箴の原材料となる竹を介した、人と自然環境との相互作用、2）竹加工製品の流通・使用を通して、人と

経済・文化・政治的な環境との相互作用と、双方の歴史的動態を理解することにある。

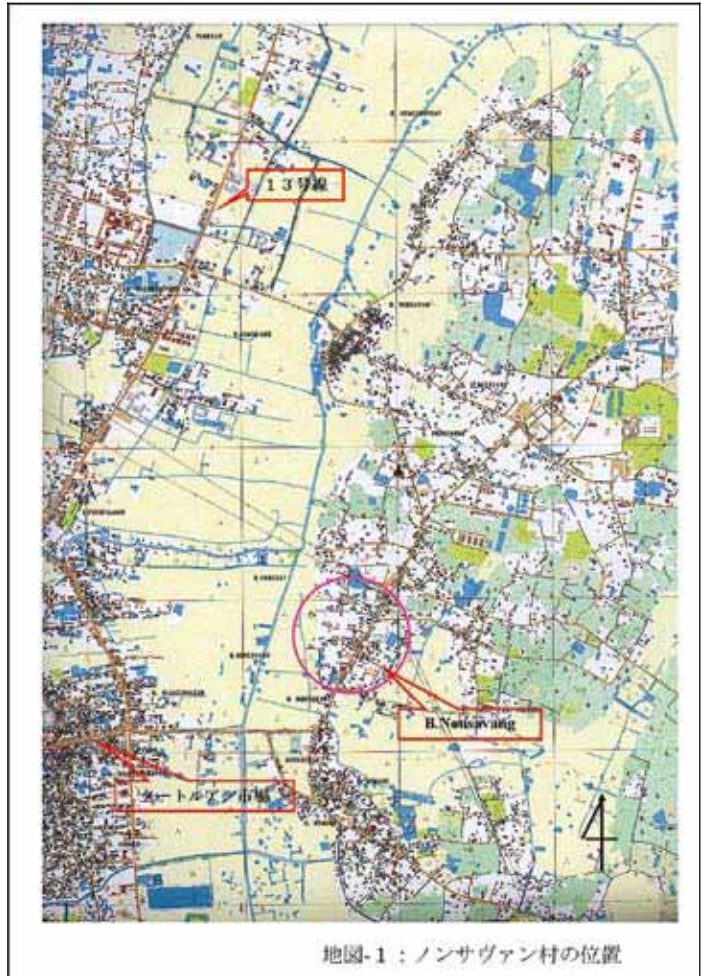
本年度は、2004 年度報告のまとめで言及した以下の3点を課題とし、箴産地ノンサヴァン等での聞き取り調査を進めてきた。

竹箴生産地ノンサヴァン村の集落形成史と集落内での技術伝承

織物の集積地・販売拠点としてのピエンチャンの展開と、製品の供給地であり部品、材料の消費地でもある農村部での社会変化

竹材の流通と伐採地の問題

の関連でノンサヴァンでの箴作り関係者の世帯調査および諸道具の実測などを、に関連してピエンチャン市内の竹材集積地（竹市場）および竹の伐採地の実情理解を進めた。本報告では、本年度の調査で得られた情報を、竹箴から竹までと、竹箴の商品連鎖の流れに沿った形で整理することで、都市部における竹消費の現状を紹介しつつ、ラオスにおける人間と竹の関係について考えたい。

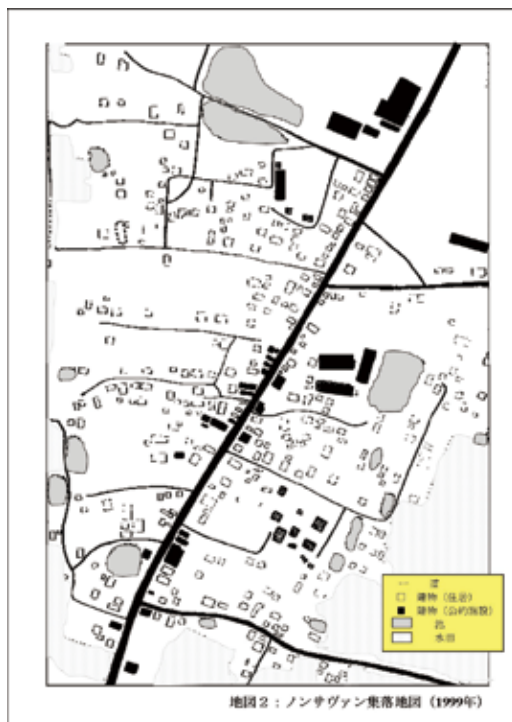


地図-1：ノンサヴァン村の位置

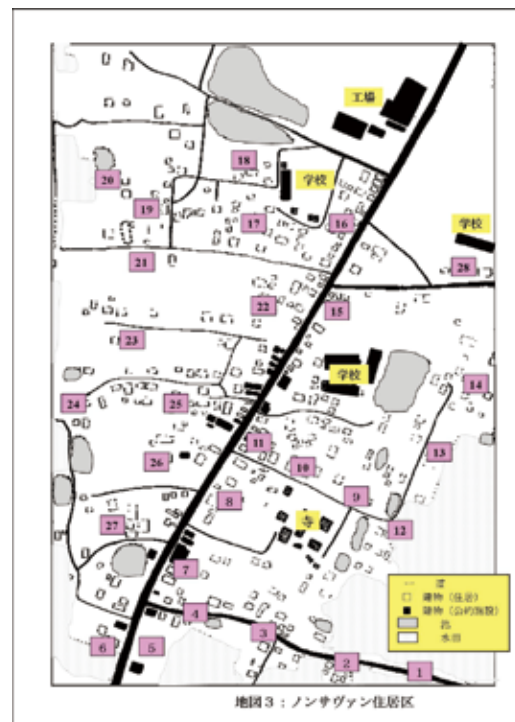
2. 竹でつくる：ノンサヴァンにおける竹箴作り

1) ノンサヴァン村概略

竹箴の産地ノンサヴァン村 (Ban Non Savang) は、ピエンチャン近郊、タートルアン市場を越えて東に少し進んだところにある（地図-1）。村役場の資料によれば、2005年時点で474世帯、人口2333人（男1148人、女1185人）となる。2002年には434世帯、人口2120人（男1064人、女1066人）とされ、3年間でも



地図2：ノンサヴァン集落地図（1999年）



地図3：ノンサヴァン住居区

40 世帯、213 人の人口増が見られる。村内は現在 28 の地区に区分けされており、住居地区の位置関係は地図 - 2、3 で示した。もっとも地図 2 および 3 は、1999 年に撮影の航空写真をベースに作成された集落地図から作成したものである。現状に照らせば、1, 2, 3 区および 12, 13 区では、水田面積が宅地造成による埋め立てのために減っており、また 1, 2, 3 区には建設工事中の住宅が目立つ。ノンサヴァン村の住民人口は、今後もさらに増加していくことが予想されるが、60 年以上前の同村一帯は、近隣から“Ban None”と呼ばれた、周囲を湿地、水田に囲まれた雑木のしげった高台で、住人はほとんどいなかったといわれる。そこに、ホクワ村 (B. Houakhoua) やノンコー村 (B. Nonkho) 住民の作り小屋が 3 軒でき、その後、移入者が増え、1960 年代ころには 7 軒くらいの家があったという (地図 - 4)。箬作りの技術を伝えたタイ人家族が移り住むようになった 1970 年代ごろでも、20 軒くらいしか家がなかったという。村の中央を走る道路も、70 年代当時には自転車を通れるくらいのアゼ道だったという。1981 年ごろには、カyson 博物館の建設に際して、整地のための土砂が大量に採集され、18 区にある大きな池ができた。また村落内にある池は、土地所有者が土砂を売った結果できたものも多い。



ノンサヴァン一帯は、この半世紀の間に、雑木の生えた高台から都市近郊の住宅地へと大きな変貌を遂げた。数軒から 470 軒以上へと家屋数が増えていく過程での、土地所有や土地売買の詳細については、十分な調査はできていないが、住宅の急増は 90 年代以降と考えられる。ノンサヴァン村における住宅急増の背景には、早い時期に同地に居を構えた住人家族の子供の代が結婚し、新居を建て独立世帯を営むようになったこと。ノンサヴァンに住む親類を頼って、地方からピエンチャンに移ってきて、その敷地内に住居を建てて住むようになったこと。もしくは親類から土地を売ってもらい住居を建てるなどのほかに、ピエンチャンの別な場所に住んでいたものが、同地に土地を購入し新居を建てて移入してきたことなどが挙げられる。移入背景の違いを反映して、村落内には、木造の高床式家屋、簡素な作りの地床式家屋から、高い塀で囲まれた豪華な邸宅まで、多様な家屋が混在している。特に、高い塀に囲まれた屋敷を構える裕福な層の住民たちは、近隣住人とほとんどつきあいがなく、箬作りとは関わりのない暮らしをしている。

2) 箬作りに携わる関係者

都市近郊の新興住宅地ともいえるノンサヴァン一帯では、(1) 竹箬羽削り、(2) 箬編み、(3) 木枠作り、のみならず、(4) 糸綜^{そうこう}統、(5) 箬通し (箬と糸綜統をセットする) などの作業が行われている。本年度は、箬作りの作業に従事する住民関係者の把握、集落内での技術伝承、住人同志、外部の依頼主などとの箬作りをめぐる労働交換や住人同士の社会関係を明らかにしたいと考え、ノンサヴァンでの世帯調査を進めてきた。村役場にて、竹箬作りや糸綜統作りに関わっていると紹介された住人を戸別訪問していくと、作業に関わっている住人情報はいもづる式に増えていった。これまでの調査で得た情報を総合すると、作業に関わりをもつ住人は 52 人となり、資料 - 1 としてリストにまとめている。この 52 世帯のうち、実際に戸別訪問できたのは 30 世帯である。

資料 - 1 に即しつつ、箬作りに関わっているノンサヴァン住人の特徴についてまとめておきたい。まずリストの 3 列目にそれぞれが関わっている作業内容を整理しているが、「箬」とするのは、竹箬作りに関わる上記 (1) (2) の作業を世帯内で行っている場合である。ただし、No.19、No.21 のように、(1) (2) のうち一方のみという場合もある。「ソウコウ」は、(4) (5) の作業に従事している世帯となるが、糸綜統編みおよびそれを箬に通す作業は、竹箬のみに限らず、ステンレス製箬も対象になる。しかも、現在はステンレス製箬向けの注文が多いといわれる。「木枠」は (3) の作業ができる世帯となる。村役場にて、以上の (1) ~ (5) の作業すべてに対応できる世帯と紹介されたのは、No.1、No.4、No.6、No.7、No.8、No.9、No.21、No.22、No.23、No.24、No.25、No.29、No.47、No.48、No.50 である。実際には、No.22、No.23 のように、それぞれの自宅

でというより、両者にとって妹夫婦世帯となる No.9 や、No.18 に暮らす両親や兄弟の家とを行き来しつつ作業に関わっている場合もある。あるいは No.25、No.29 のように主に妻が綜統編みの仕事をしているところもあるし、No.1、No.4 や No.30 のように、ヤリガンナを使って木枠を作ることは習得したが、今は製材機を持つ所に頼んで作ってもらうという場合もある。作業内容のうち「箴」「ソウコウ」の2条件が揃っている世帯は、箴作りはやめてしまった No.10、No.33 (No.16、No.18 はできるという伝聞だけで未確認)を除けば、木枠の入手法は自前、購入の違いはあれ、箴と糸綜統をセットした完成品を市場に卸していると考えてよい。

リストの4列目では、それぞれの世帯の構成員数および、世帯内で作業に従事しているとされるメンバーの人数をまとめている¹。実際に戸別訪問できていない未確認のケースも、世帯構成員のうち最低一人が上記(1)~(5)のいずれかの作業に関わっているものと計算しても、箴作りに関わる住民関係者は90人を超える。また、箴作りの工程も細かく見れば、(1)(2)(3)の作業を担っているのは主に男性で、(4)(5)は女性となる。(4)の作業に必要な綜統用の糸を掛けていく竹ヒゴは、夫や子供らが手のあいたときに竹を削って用意している。それでも足りないときには、余所から買ってきて間に合わせることになる。特に(5)の作業は二人で行うため、あるいは目が疲れるということで、小さい子供たちに手伝わせていることが多い。就学中の子供たちは、長期休暇中に親の作業を手伝うし、大人も子供も学校や仕事から帰宅した後や休日に作業を手伝っている。現在は作業をしていなくても、幼少時に手伝いをしたことがある、しばらくやっていたなどの経験者を含めれば、箴作りに関わっている住人はさらに増えていくだろう。

さて、昨年度の報告書でも述べたように、ノンサヴァン村に箴作りの技術を伝えたのは、タイ人A氏(1937-1987年) = No.3とされる。1986年から2000年まで水力発電所建設の仕事でサヤブリ県に行っていたA氏の長男によれば、イサーン地方ノンコン出身のA氏家族は、ワット・ナー村、サバンモー村で暮らした後、70年代に土地を買ってノンサヴァンに住むようになった。その後、A氏はノンカイに出かけ2~3年ほど織物工場で働き、竹箴作りの技術を身につけて村に戻ってくる。A氏はノンサヴァンにて竹箴作りを始めるが、当時高校に通っていたA氏の長男や近隣に住む息子の同級生たちに、遊んでいるのなら手伝えと作業をさせるようになった。78,9年ころには、A氏の長男、No.17の他2名の4人の若者がA氏のもとで竹箴作りをしていたという(他の2名のうち、1人はすでに死亡、もう1人はアメリカに移住)。そこに近所に住むNo.2、No.4、No.52の男性や、No.4の義弟であるNo.1が出入りしたり、またその妻たちもやってきて、A氏の妻より綜統編みを習うようになった。さらにNo.50がA氏自宅の作業場を覗きにくるようになった。若者たちはその後それぞれに大学、専門学校へ進学すると、寄宿舎から村に戻ってきた土日に手伝う程度となり、次第に竹箴作りから離れていく。その一方、82年に軍を除隊したNo.4の男性が、本格的に竹箴作りを習うようになる。80年代前半には、A氏の作業場でA氏の次男の他、No.2、No.4、No.52の男性が竹箴作りをしていたという。またNo.50の男性は、A氏の作業場を見学しながら竹箴作りの技術を見て習い、A氏たちとは別に、独自に竹箴作りをするようになる。

A氏健在の頃は、A氏自らが材料を調達していたという。A氏は近隣のノンコー村から、節のしっかりした3,4年目のマイ・パイ・バーン(mai phai barn: *bambusa blumeana* J.A.&H.S.Schultes)を選んで切ってきたり、削った箴羽の束を1週間ほど炉の上に吊るし燻製にして羽を丈夫にするなどの処理もしていた。またA氏のもとには、コマリ氏の工房のほかに、ピエンチャン市内の6つの村(B.Phanhmanh, B.Suan mone, B.Boh O, B. Nong Hai, B.Hat Kanhxa, B.Phone Tong)の村人が箴を買いに来ていたという。ときにはピエンチャンから南に75キロあたりにあるPak Gum村や、シェンクワン、サムヌアからの注文もあったという。しかしA氏が1986年に死去すると、その頃には子供たちもそれぞれ別な仕事についていたため、A氏の妻は綜統の仕事が続けていたが、A氏家族は竹箴作りをやめてしまった。一方、A氏作業場でいっしょに作業をしてきたものは、自宅で竹箴作りをするようになる。そしてA氏から竹箴作りを習ったものたちもまた、近所に引っ越してきた隣人に技術を教えるなど、集落内に竹箴作りの技術が広まっていった。例えば、アイスクリーム売りをしていたNo.5に、より安定した仕事になるからとNo.4が竹箴作りを教えた。No.2より手ほどきをうけたNo.18の男性家族では、現在、その子供たちの世帯となるNo.9、No.22、No.23が箴作りをしている。またNo.24の男性は、娘の夫がNo.18

1 世帯の構成員数は、村役場で貸借した住民台帳資料と、戸別訪問によって確認。

の息子にあたり、竹箴作りの技術は No.18 の男性や、当時は娘の恋人である No.18 の息子から技術を習っている。大使館の警備員をしている関係から、外国人からの注文を受けることのある No.17 の男性は、近所に引っ越してきた No.12 夫婦の夫（現在は離婚して、元夫は別な村に住む）に竹箴作りを教え、彼を雇って竹箴作りをしていた時期もある。No.12 はその後、No.17 より独立して家族で竹箴作りをするようになる。また、No.19、No.21、No.25、No.29 は、たまたま No.12 の近所に引っ越してきたわけだが、家計の助けになればと No.12 の元夫から竹箴作りを習い、妻たちも綜統の仕事をはじめた。

現在、No.20、No.21、No.25、No.26、No.27、No.28 の女性たちは、No.20 もしくは No.21 の家に集まって、いっしょに綜統の仕事をしている。綜統の仕事は、それぞれ個人で注文を受けているが、作業が単調なので、女性たちはご近所同志で気の合う相手と集まって、おしゃべりをしながらいっしょに作業することが多い。たとえば No.28、No.29、No.32、No.33 の女性たちが集まって作業をしている。また 4、5 年前までは、No.35、No.36、No.37、No.38、No.39、No.40、No.42、No.46 の女性たちもよく集まって、綜統の仕事をしていたが、当時、作業場所になっていた女性の家族が転出した後は、大人数で集まることはなくなったという。さらに、No.35、No.37、No.42、No.46 らは、綜統の仕事をする以前、ラオコットンからの注文を受けて自宅で木綿布を織る仕事をしていたという。女性たちにとって、出身の村で織物をしていたことがあるなど、もともと綜統のしくみになじみがある場合もあり、単純作業の綜統の仕事はとっつきやすいものだったといえる²。新参者は、主婦の集まりに出入りしながら綜統の仕事覚え参入していくことで、住人内に綜統の技術が広まっていったと考えられる。

ところでノンサヴァンで作られた箴は、主にピエンチャンの市場にある機料店で販売されている。機料店はタラートサオに 3 軒（資料 - 1 のリストでは T-1、T-2、T-3 と示す）コウディンに 1 軒（K-1）あり、資料 - 1 のリスト 5 列目に示すように、箴作りの関係者は作業成果を売り込む相手をそれぞれに持っている。その相手は市場の 4 機料店に限らず、No.12 のように、サムヌア、シェンクワンの市場に製品を送っているものもいる。また、市場機料店に完成品を卸すのみならず、村内では、竹箴羽削り、箴編み、木柁作りのみの作業成果を住民同士でやりとりするケースも多々見られる。綜統の仕事の場合、材料などを注文主が用意し、綜統編みや箴通しの作業を請け負って手間賃を稼ぐケースもあれば、市場からステンレス製箴を預かり、綜統用の糸や竹ひごなどの材料を各自でそろえ、セットしたものを注文主に納めているケースもある。箴羽削り、箴編み、木柁作りを人に頼み、綜統糸をセットしたものを販売している場合もある。また、世帯内で箴本体も作り、糸綜統をセットした完成品を商売相手に納めているケースでも、注文数が多くて人手が足りないときには、綜統の仕事を外注することになる。こうした注文も、あくまでも需要に応じたもので、決まった量がコンスタントに入るわけではない。作業成果をめぐる住人間でのやりとりも、かなり不安定で緩やかな関係といえる。

資料 - 1 の 7 列目にまとめているように、箴作りに関わっている住民たちの出身地は多彩である。個々のケースの詳細は述べないが、関係者たちは、それぞれの出身村を出てからノンサヴァンに移入するまでに、村からピエンチャンへの間、そしてピエンチャン市内をあちこち転々としている。その間、農業労働、賃労働、小商いなど、仕事もまた転々としている。たとえば 6 列目に軍人、警備員、役所勤め、教員等、世帯主の職業（退職前の仕事も）を挙げてはいるが、それぞれの世帯は、竹箴作りや綜統の仕事以外にも、会社・役所勤め、さまざまな小商い、建設現場での賃労働など、複合的な手段で家計をやりくりしている。関係者たちにとって、箴作りへの参入も、ノンサヴァン移入後に暮らしをたてていく上での、さまざまな選択肢のなかの一つにすぎず、今後、箴や綜統の注文が減る、あるいは、もっと実入りのよい仕事が入れば、箴作りをやめて乗り換えてしまうだろう。

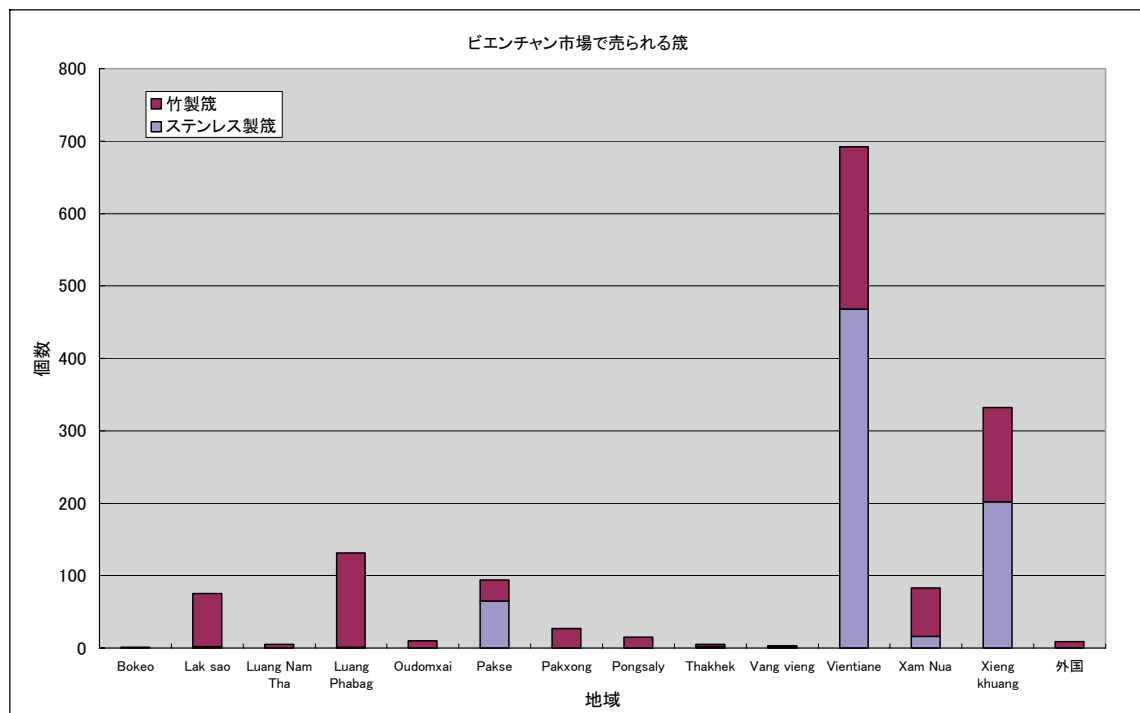
1970 年代後半にタイより戻った A 氏がはじめた箴作りだが、その後、近隣の住民や後続の移入者と、ノンサヴァンでは箴作りに関わる住民が増えていき、現在、住民の 15 ~ 20% が箴作りに関係しているものと推測される。ノンサヴァンは出身地の異なる人々の集住する住宅地であるが、そのなかで、箴作りに関わる住民たちは、竹箴作りの技術の習得、集まって仕事をする、作業の注文・請負等のやりとりを通じて、緩やかで、かつ複雑な関係を築いてきたといえるだろう。

² 糸綜統を編む道具は、木の板と、廃材を組んだ木製台に 1メートル弱に切ったプラスチック製水道管 2本を渡しただけのものである。道具類は、手元にある廃材などを集めて加工すれば、なんとかなる程度のものであり、習う側も、作業の原理とコツさえわかれば始められる仕事といえる。

3] 箬の行き先：事業日誌より

ノンサヴァンでは、世帯に応じて箬作りへの関わり方が、作業の内容・量および仕事のペースも含めて異なる。したがって全部の工程ができるとされる関係者世帯一つを例に、産地全体でどれくらいの量の箬が生産されているのかを正確にはかる事は難しい。ただ最近の傾向として、竹箬の需要は減りつつあるものの、木枠作りや綜統の仕事の注文が増えているという。

ノンサヴァン製箬に対する需要動向をはかるために、本年度の調査では、ビエンチャンの機料店 T-1、K-1 の 2 軒に、2005 年 8 月から 2006 年 2 月の半年の間、店頭で販売された箬の記録付け（以下、事業日誌と呼ぶ）を依頼した。事業日誌には、販売した箬について、竹製、ステンレス製の違い、箬のサイズ（ローブ数と幅 cm）と販売本数、買い手がどこからきたかなどを記入してもらった。商品は毎日コンスタントに売れるわけでもないし、記入漏れもかなりあるだろう。T-1 の事業日誌は、店主が高齢であることや、店を手伝う娘たちが休憩で入



図表－1 a：ビエンチャン市場で販売される箬の行方

	ステンレス製	竹製
Bokeo	0	1
Lak Sao	2	73
Luang Nam Tha	0	5
Luang Phabang	1	130
Oudomxai	0	10
Pakse	65	29
Pakxong,	0	27
Pongsaly	0	15
Thakhek	2	3
Vang Vieng	2	1
Vientian	468	224
Xam Nua	16	67
Xieng Khuang	202	130
外国	0	0

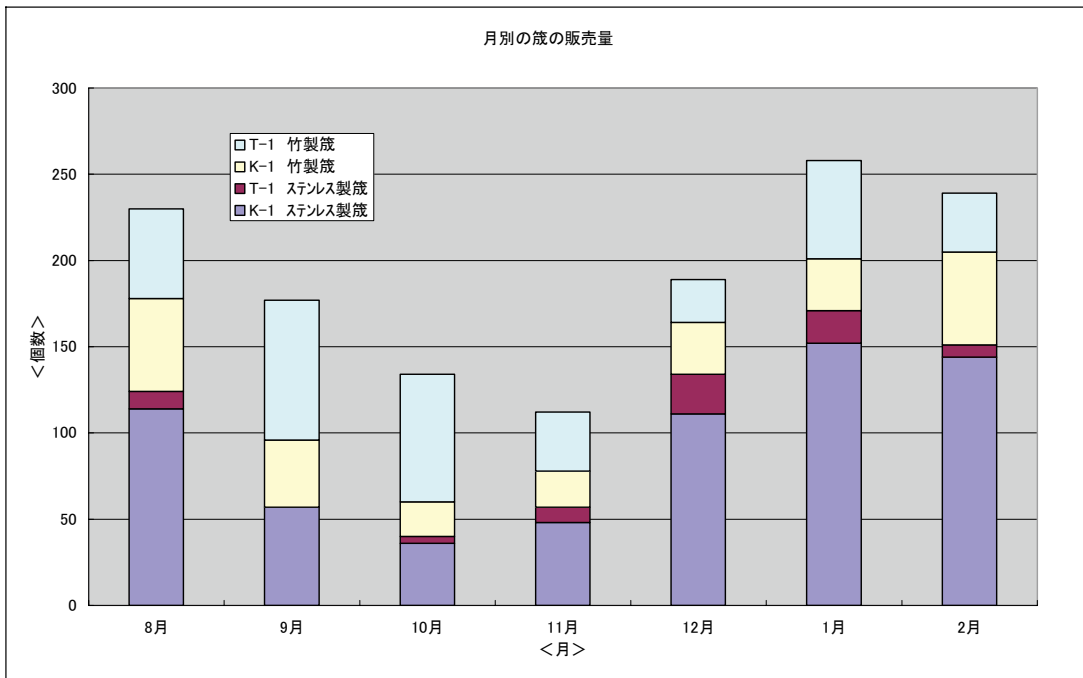
図表－1 b：市場で販売される箬の行方

れ替わり、記録を忘れた日もあったといい、実際、K-1 店に比べると、事業日誌の書き方も粗雑である。一方、K-1 店の場合、店頭販売分はこちらの期待する以上に、こまかくに記録をつけてくれていた。ただ、K-1 店の場合、店舗販売分よりも電話注文による販売量が多いという³。したがって、事業日誌からのデータは、この半年間でピエンチャンの市場から売られていったすべての箬数を反映しているわけではない。それでも、口頭で説明される動向よりは詳しい箬の市場動向を教えてくれるだろう。

事業日誌に基づき、K-1 と T-1 それぞれの店頭で販売された箬の、半年間の売り上げ数と、箬を購入した人がどこから来たのか（箬の行き先）を、ステンレス製、竹製箬ごとにまとめたものが資料 - 2 となる。事業日誌に記録された販売個数に基づけば、2006 年 2 月までの半年間で、ピエンチャン市場の 2 店舗で販売された箬は全体で 1496 本となる。購入者がどこから来たのかなどが不明な 14 件を除いた 1482 本（ステンレス製が 758 本、竹製箬は 724 本）のうち、K-1 店の販売個数は 1020 本（ステンレス製は 662 本、竹製は 358 本）、T-1 店が 462 本（ステンレス製は 96 本、竹製は 366 本）となる。この 1482 本の箬の購入者は、図表 - 1a、1b に示すように、ピエンチャンのみならず、外国も含めて、ボンサリー、ウドムサイ、ルアンナムター、サムヌア、シェンクワン、ルアンパバン、ヴァンピエン、ボケオ、カムアン県ラク・サオ Lak sao、タケク、サバナケットのパクソン Pakxong、パクセと、全国各地に広がっている。

購入者の地域で見ると、箬の購入数はピエンチャン（692 本）がもっとも多く、第 2 位のシェンクワン（332 本）とあわせて全体の約 69% を占める。ステンレス製箬の買い手はピエンチャン、シェンクワン、パクセ、サムヌアが中心で、竹箬の方が購入者に地域的バリエーションが見られる。またピエンチャン、シェンクワン、パクセ、サムヌアではステンレス製、竹製の双方が利用されているが、ピエンチャン、シェンクワン、パクセでは、利用される箬が竹製からステンレス製に置き換わりつつある織りの現場の様子が見て取れる。

箬の月別の販売個数を見ると、下記の図表 - 2 で示すように、本年度は 9、10、11 月と購買者が減っていき、そこからまた増加に転じる需要の動きが見え、関係者による、“農閑期に入る 10～11 月ころから需要が増える”という説明を裏付けるような動きとも言える。ただし、事業日誌の数字は、8 月、2 月の販売数は半月分となるし、K-1 店のように店舗販売よりも電話注文と荷物の送付・代金振込みによる販売量は反映していない。実際に、箬の需要の季節的な変化をいうためには、通年で見ないとわからないため、2 店舗には 06 年 8 月まで記録付け

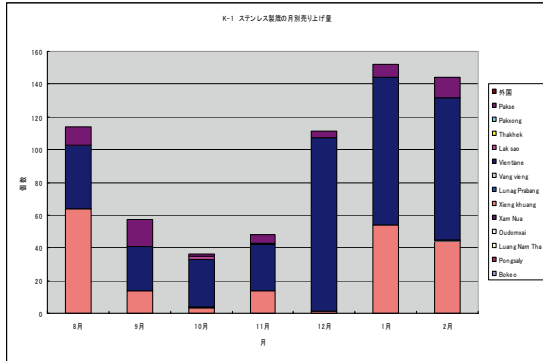


図表 - 2 : 箬の月別販売数 (全体)

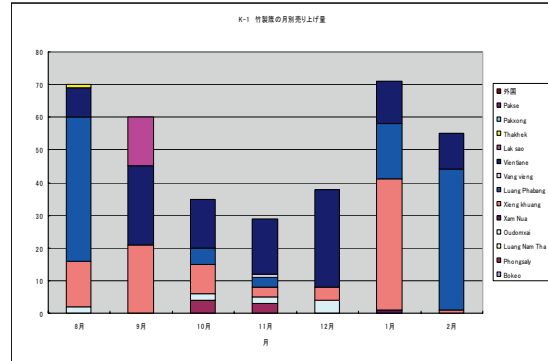
³ T-1 店は、タラサオにて 30 年以上も機料店を続けてきており、市場にある機料店 4 軒のなかで一番古くから箬の売買をしている。K-1 店はベトナム人の店で、90 年代から箬はじめ織りの諸道具、材料の商いをはじめ、商売を広げてきたという。

の継続をお願いしている。

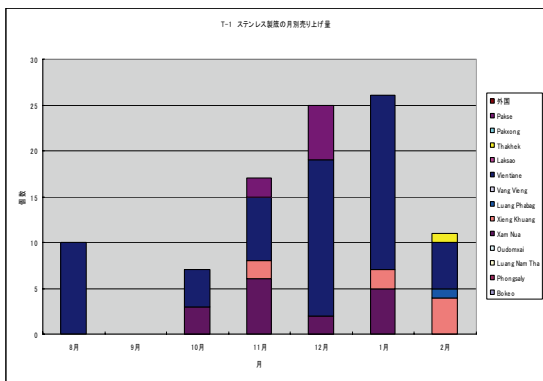
月別の販売個数を、店舗およびステンレス製、竹製の別で見ると、以下の図表3～6となる。これら4つの表を見比べると、ステンレス製より竹製、K-1店よりT-1店のが、買い手の地域がより多様とある。また、T-1店舗での竹製の販売動向を除けば、両店でのステンレス製筴、K-1店での竹製ともに、販売個数の推移は、全体と同じような動きをしていることがわかる。竹製の需要で、カムアン県のラク・サオ Lak sao (表中ではピンク色)



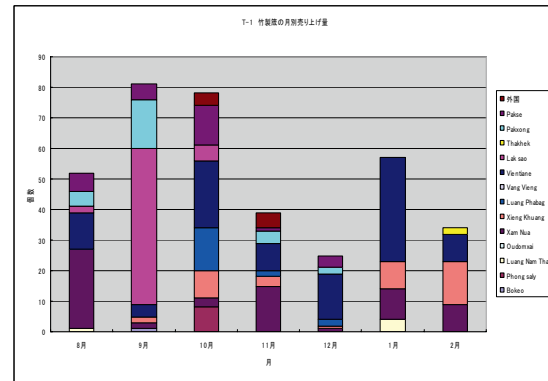
図表-3 : K-1 店での月別販売個数
(ステンレス製筴)



図表-4 : K-1 店での月別販売個数 (竹製)



図表-5 : T-1 店での月別販売個数
(ステンレス製筴)



図表-6 : T-1 店での月別販売個数 (竹製)

が9月に増えたのは、ピエンチャンの工房による織物プロジェクトとの関連が考えられる。

さて、資料-2の各表末尾に購入された筴の種類数を挙げている。筴の注文はロープ数と幅のサイズで指示され、筴を作る側に見れば、筴を利用する側の地域差よりも筴の種類が重要となる。筴の主要な消費地となるピエンチャン、サムヌア、シェンクワン、ルアンパバン、パクセの5地域で、ステンレス製752本、竹製580本と、筴の販売個数は1332本(全体の89.9%)となるが、筴の種類で見ると87種類になる。ただ、その内訳を見ると、利用される筴の種類に偏りがあることがわかる。

これら5地域において人気のある筴の種類を、販売数の多い順から整理したものが図表-7となる。5地域で販売個数の多い種類を挙げると、8ロープ・14cmの筴が242本、40ロープ・80cmが190本、9ロープ・45cmが155本、18ロープ・83cmが115本、10ロープ・20cmが78本、7ロープ・14cmが70本となる⁴。次に9ロープ・40cmで40本、そして15ロープ・80cmの32本が続く。この8種類の筴だけで921本となり、1332本の69%(ステンレス製は487本で64%、竹製筴は434本で74%)を占めることになる。5地域それぞれで、地域内で利用される筴の種類と量に偏りが見られる⁵。こうした偏向から、それぞれの織物産地で現在、織物の量産化および、製品の規格化もしくは均質化が進んでいることがわかる。

特にピエンチャン、シェンクワン、パクセの3地域では、売れ筋の筴はステンレス製筴となり、しかも筴の販

4 筴の幅が14cm、20cmはパーヴィアン用。80cm、83cmはシン用。同じ幅の筴でも、ロープ数が大きいと筴密度が高く、目の細かい(細かい糸で経糸本数の多い)織物用になる。

5 18ロープ・83cmの筴は、ボンサリー(販売総数15本のうち12本)やウドムサイ(10本中6本)に売られていった筴のほとんどを占める。

図表－ 7：販売数の多い箬の種類

箬の種類	総数 (本)	サムア		シェンクワン		ルアンパ°バン		ヒ°エンチャン		パ°ケ	
		ステン	竹	ステン	竹	ステン	竹	ステン	竹	ステン	竹
8-14	242				7			229	6		
40-80	190	2		78	2			54	4	47	3
9-45	155	3	7		22		69	2	49		3
18-83	115		6	2	49		12	4	41		
10-20	78		3		44				24		7
7-14	70	2		1	3			62	2		
9-40	40		2			1	29		8		
15-80	32		22		4		1		5		

売個数はステンレス製箬が竹箬を上回っている。実は、織物の産地でステンレス製箬の利用が増えることは、ステンレス製が竹箬と比べて箬羽が摩滅せず耐久性があるため、織り手は毎年箬を買い換えなくてもすむようになり、箬の需要が減っていくことを意味する⁶。ただノンサヴァンで聞くと、ステンレス製箬向けの綜紉の仕事は2005年に入って増えたということで、現在は主要な織物産地でステンレス製箬が普及していく過渡期にあると考えられる。箬作りの現場では、減りつつあるものの竹箬の需要もあり、加えてステンレス製箬用の綜紉の需要が増え、仕事の注文が入る状態にあるといえる。ただ、こうした活況が今後あと何年続くかは不明である。

4) 箬作りと竹の消費量

ノンサヴァンでは、竹箬作りにマイ・パイ・パーン (mai phai par : *bambusa arundiana* var. *spinosa* Retz) が利用されている。マイ・パーは、箬羽のみならず、箬羽を支える蛇骨の部分、そして綜紉の竹ひご用にも利用される。ここでは、ノンサヴァンでどれくらいの竹が消費されているのかを考えたい。

図表 - 8 では、先述した5つの織物産地向けに販売された人気のある竹箬の種類ごとに、その販売個数をま

箬の種類	サムア	シェンクワン	ルアンパ°バン	ヒ°エンチャン	パ°ケ	計	箬羽の枚数
8-14		7		6		13	4160
40-80		2		4	3	9	14400
9-45	7	22	69	49	3	150	54000
18-83	6	49	12	41		108	77760
10-20	3	44		24	7	78	31200
7-14		3		2		5	1400
9-40	2		29	8		39	14040
15-80	22	4	1	5		32	19200

図表－ 8：竹箬の種類と箬羽の枚数（竹の消費）

6 もっとも織物市場における流行次第で、仮に毎年毎年、織物の幅や織り密度の違う織物が求められるのならば、織り手は、ステンレス製になっても、注文に応じて箬の種類を変える必要がでてくる。

とめている。これら竹製箬の合計は434本となる。箬羽は40枚で1ローブと計算され、「nローブ、xセンチ」と表現される箬の種類は、xセンチの長さのなかにnローブ、つまり40×n枚の羽が並べられていることを意味する。したがって434本の竹箬は、あわせると216,160枚の竹箬羽が使われている計算になる。

竹箬作りの工程では、まず1～1.2mの丸竹(=1節分)を、節を切取って箬羽に必要な長さにしてから、縦に割って16分割する。分割した割竹1枚から10本の竹へぎが取れるように、割竹を縦に割いていく(=丸竹1本から160本の竹へぎ)。竹へぎは、剃刀の刃を取り付けた台を使って、厚み、幅を整えるために1枚1枚削る。箬羽編みでは、薄く削られた箬羽を櫛状に並ぶよう編み上げていくが、箬羽の端を2本の竹ひごで挟み、箬羽1枚1枚を支柱となる竹ひごに固定するよう、糸をかけて編んでいくことになる。箬編みの作業では、箬編み台に、両端を支える4本の竹ひごをセットし、竹ひごの間に竹箬羽1枚1枚を挿入して糸で編んでいく作業を繰り返す。竹箬羽削りできた長いままのものを使って作業を始め、箬羽を並べつくと、最初に編みこんだ箬羽の、はみ出た部分を切り取っては挿入していくことで、編みの作業を続けていく。

箬羽の長さは10cm強となり、竹箬羽削りの作業でできる竹ひご一本から8～9枚の箬羽がとれることになる。竹ひご1本から8枚の箬羽をとるとすれば、434本の竹箬、つまり216,160枚の竹箬羽は、丸竹168.9本分(216,160枚を1280=160本×8で割る)に相当する。丸竹約170本というのは、あくまでも図表-7,8にあげた8種類の箬の販売個数からの計算であり、8種類の竹箬の販売個数は5地域での竹箬販売数全体の74%にあたる。単純計算すれば、5地域分では228本の丸竹に相当する。さらに、5地域だけで全体の89.9%を占めるので、事業日誌に記録された販売数全体では、使われた竹は約253本分になると考えることができる。

先述したようにノンサヴァンにおけるマイ・パーの利用は、竹箬羽のみに限らない。竹箬、ステンレス製箬にセットする糸綜絢でも、綜絢糸を掛けるための竹ひごにマイ・パーが使われる。綜絢用の竹ひごは箬の幅によって異なるため単純化できないが、「1本の丸竹から30本くらいの竹ひごをとる」という(丸竹一本を16分割したものをさらに2分して、1本1本をヤリガンナで削って形を整えることになる)箬にセットされる綜絢の枚数も織物に応じて異なるが、綜絢は2枚か3枚、つまり竹ひごでは4本か6本が一つの箬にセットされる。竹ひご4本か6本の間を取って5本と計算すれば、2軒の機料店で店頭販売された箬1492本では、竹ひごの消費量は1492×5本の7460本となる。丸竹1本から30本の竹ひごをとるとすれば、7460本の竹ひごは、丸竹248本分に相当する。先の竹箬羽用に消費される253本とあわせれば、2店舗、半年間の販売箬1492本だけで、500本近くの丸竹が消費されていることがわかる。

2店の事業日誌から得られた箬の販売個数は約1500本で、K-1店は店舗販売分より電話注文による販売分が多いということ、T-1店の書き漏らし分、T-2およびT-3(糸専門で店頭に並べている箬は他店より少ない)の商売規模などを勘案すると、ピエンチャンの市場で売られた箬の個数は、半年で3500～4000本くらいになるのではないかと考える。雨季乾季での需要の増減は、現在記録してもらっている残り半年分の事業日誌を待たねばならないので、ひとまず季節性の問題は無視して、単純計算で二倍すれば、箬の需要は年間7000～8000本くらいを見積もることができる。箬1500本で丸竹500本を基準にすれば、ノンサヴァンにおける竹の消費は、年間2333～2667本を見積もることができる。以上は、一節分の丸竹で計算したものであり、マイ・パーは6,7節あるといわれるので、少なくとも年間400～450本以上の竹が、箬作りのために消費されていると考えられる。

3. 竹材の売買と竹の伐採地

ノンサヴァンの関係者たちは、箬作りに使うマイ・パーをタートルアンの竹売り場で買ってくるという。では、そのマイ・パーはどこから来るのだろうか。本章では、都市部でのマイ・パー利用と竹材を供給する伐採地の状況についてまとめた。

1) ピエンチャンの竹材集積地

ノンサヴァンでのマイ・パー消費との関連で、本年度の調査では、ピエンチャンにおける竹材の流通の概況を把握するために、市内にある竹材の集積地の所在確認と、竹売買の状況について調べている。資料-3に市内12箇所の竹材店に加え、ダンカン、ダンカン・ノンダーの2箇所を挙げ、それら竹材集積地で扱われていた商品をもとめている。竹材の集積地は、ダンカンを除くと、ピエンチャン郊外から市内中心部に向かう道路の沿道



写真-1：竹筏による竹材の運搬



写真-2：竹市場での竹の加工

にあり、郊外から見て、中心部への入り口にあたるような位置にあるといえる。資料-3のダンカンは、メコン川の港よりほんの少し上流に位置し、メコン川を竹筏で運ばれてくる竹材の荷揚げ場所となる（写真-1）。ここで荷揚げされた竹は、市内各所の竹材集積地にトラックで運ばれていくことになる。ダンカン・ノンダーは、竹材の荷揚げ場所に近接する村で、村人たちが竹製のゴミカゴや垣根を作っている。

竹材の集積地では、竹棹だけでなく、売り場脇の作業で加工された竹製品も積上げられている（写真-2）。資料-3には、それぞれの店舗が扱っている竹棹の竹の種類や、その場で加工生産される竹製品を中心にまとめているが、どの店も品揃えはかなり似通っていると言えよう。つまり、マイ・パー Mai phai par、マイ・ヒア Mai hia の竹棹を中心に、マイ・チンと呼ばれる建築現場の足場や支えにする木材があり、規模の大きいところなら、さらにマイ・サンパイ Mai sarng phai の竹棹や萱葺き用の萱（ニヤームン）を揃えている。また、マイ・パーやマイ・ヒアを編んだ、垣根、屋根、壁などに用いられる竹製品やニワトリカゴ類が、その場で加工され販売されている。集積地で加工される竹製品は、技術的にも簡単なもので、都市部での日常生活で利用される消耗品といえるだろう。

竹材集積地を見ると、ピエンチャン市内で利用される竹の種類はかなり限られていることがわかる。ピエンチャンという市場が求める竹は、主にマイ・パー、マイ・ヒア、マイ・サンパイとなる。マイ・パーとマイ・ヒアは、サントン郡からメコン川を竹筏で運ばれてくる、もしくは、プーパナン山付近で伐採され陸路をトラックで運ばれ、マイ・サンパイはバンヴィエン、カシー、シェンクワン方面からトラックで運ばれてくるという。竹棹の価格はマイ・パーが kp.4000/本、マイ・ヒア kp.3000/本、マイ・サンパイ kp.6000/本となる。一方、マイ・パイ・パーンは量で入荷されるわけではなく、稀少で1本の価格も高い。店頭で加工・販売されるマイ・パイ・パーン製品も、巨大な米カゴや竹一本を使ったハンモックなど、個数の少ない特殊な製品となる。その他マイ・パイ・パーンやマイ・ソットを使った製品は、それを集中的に作っている村から仕入れる。

2] 竹の伐採地

ここでは、都市部にマイ・パーおよびマイ・ヒアを供給する竹の伐採地サイドの状況についてまとめる。竹材を竹筏にしてメコン川で運んでくるサントン郡と、陸路で竹材を運んでくる13号線沿道、プーパナン山 Phou phanag 付近の地域とを分けて、伐採地における住民と竹との関わりについて整理する。

(1) 竹筏による竹材運搬とサントン郡での竹伐採

ピエンチャンに卸される竹は、メコン川の支流、ナム・サン川 Nam Sang 沿岸の森で伐採される。ナム・サン川近くの村々、つまりサントン郡のワイトン村 B.Houathom、クワイ村 B.Khouy、ソー村 B.Xo、ワンマー村 B.Vangma が、昔から竹筏にした竹材をピエンチャンに供給してきたといわれる。竹の伐採地の事例としてワイトン村の状況を紹介する。

ワイトン村は80戸、人口300人規模の村で、かつてはナム・サム川近くに村があったが、6年ほど前に道路ができたことで、道路沿いに場所を移した。村人はナム・サン川沿岸に竹を伐採に行くが、そこは村の共有林（Pa Somsai 282ha）となっており、村人は誰でもが竹材や筍を自由に採ることができる。一方、村の保護林区には竹はないという。

村では、竹筏による運搬とピエンチャンへの出荷をしているものが14人くらいいるという。竹の出荷は年に3回ほどで、乾季なら700本、雨季では1000～2000本ぐらいを運ぶ。なかには1回につき3000～4000本もの竹を運ぶ者もいる。ただし、自分の家族だけでは農作業もあり、1000本、2000本もの竹を伐採することはできず、自力で集められる竹はせいぜい500本までとなる。竹筏による竹の出荷では、自前で調達した竹に、他の村人からkp.800/本で集めた竹材をあわせて運ぶことになる⁷。竹筏による運搬は一日仕事となり、乾季ならば朝7時ごろに出発して、夜7時ごろにピエンチャンに到着。雨季の場合、朝7時に出発して夕方4時ごろに到着となる。

竹を運搬・出荷する場合、竹を切り出してから、実際に筏で出発するまでの間に、さまざまな手続きを済ませなければならない。竹の出荷では、郡の森林事務所による検品と出荷証明書が必要となり、さらに検品と出荷証明書発行のための申請書を用意しなければならない。竹筏で出発するまでに必要となる手続きを、順を追ってあげると以下となる。

森林事務所に提出する申請書への、村長からの内容証明書(手数料kp.5000～10000)

郡の森林事務所にて申請書の提出と手数料の支払い(kp.10000)

申請内容が認められれば、森林事務所職員が出荷予定の竹材の検品にやってくるので、検品に立会い、その場で検品証明書をもらう。

検品証明書に村長の承認サインをもらい、森林事務所所長宛に提出。

森林事務所でお荷証明書の受け取りと税金の支払い(税金kp.300×出荷本数、kp.300の税金の内訳は、kp.250がロイヤリティ、kp.30が森林管理手数料、kp.20が植林代)

竹筏で出発する村の船溜りにて、出発前に国境警備軍に対して通航手数料を支払い(kp.50000)

ダンヘー船着場で通航手数料支払い(kp.10000)

竹筏による出荷では、事務所に支払う各種手数料のほかにも、郡の森林事務所と村の間約30kmをバイクで往復する際にかかるガソリン代(1往復で1、kp.10000を消費)や、竹筏に搭載するエンジンの燃料代(10、kp.100000)および移動中の食事代(夫婦2人分2回、kp.30000)などがかかる。また、森林事務所との往復も、の提出時、の受け取り時の2回で済むこともあれば、申請書を提出したその日のうちに、申請書が処理され検品予定日の通知までに至らなければ、何度か事務所まで足を運ぶことになる。また、竹筏による運搬では、雨季のメコン川は水量があるのでエンジンをつけなくてもすむが、乾季には行きにも使うことになる。

参考として、以上の図表-9に竹筏による竹材出荷に伴う支出入をまとめた。実際には出荷のたびに、筏に組む竹材の本数も、自前で調達した本数と人から買い集める本数の内訳も異なるので、あくまでも目安として、500本の竹材を自前で調達して出荷する場合、500本をすべて人から集めて出荷する場合、1000本の出荷で自前分、他から調達分を半々で確保する場合の支出入計算を挙げている。現状では、竹筏による運搬だけは儲からず、自前で伐採調達できる本数にも限りがあり、それだけを出荷しても大した儲けにはならない。

出荷に際して書類の手配と支出が必要となったのは2,3年ほど前からという。それ以前は、ピエンチャン特別市の森林局が入札を行い、ピエンチャンの竹材業者に対して、年ごとに竹を伐採する村および伐採本数を指定し、竹を買い付ける側が、竹筏の運航・運搬に必要な諸手続きや税金の支払いも行っていったという。その当時は、竹は1本300キープで竹材業者に買い上げられていたが、村人は煩雑な手続きをする必要がなかった。それが郡の森林事務所が管轄下の資源管理を担うようになり、また村人も、自分たちで竹材の調達から販売までの手配を、各自の自由裁量でできるようになった。1本300キープが1000キープ以上で売れるようになったことで、他に現金収入の手段がないこともあり、村では竹を伐採する人も、竹筏で運搬する人の数も増えたという。しかし、現実には、様々な手続きを自らでせねばならず、手配のための出費も増え、そこで儲けをあげようと思えば、できるだけ出荷本数を増やすしかない状況になったという⁸。仮に1人が年3回であわせて2700本の竹を運ぶとして、村には運搬を担う人が14人いるので、ワイトン村では年間37800本以上もの竹(マイ・パーおよびマイ・ヒア)が伐採され、ピエンチャンに出荷されていることになる。村の共有林の竹なので、村人誰もが伐採可能と

⁷ 村人からの竹も、すでに竹筏としてまとめられたものをもらうので、自身で集めた分の竹筏と他の人の竹筏を合体させて運ぶことになる。

⁸ 儲けを増やすため、森林事務所による検品を受けた後に、竹筏に未検品の竹を混ぜて運ぶことも行われているということだ。ただし、それがばれると罰金が科せられる。

支出入		500本を自前で 調達	500本を人から 調達	1000本（自分 で伐採 500本）
収入	売り上げ 1000 / 本	500,000	500,000	1,000,000
支出	竹材を買上げた相手への支払い 800 / 本	0	400,000	400,000
	① 村長からの内容証明手数料	5,000	5,000	5,000
	② 申請書提出と手数料	10,000	10,000	10,000
	* 村と森林事務所との往復ガソリン代	10,000	10,000	10,000
	⑤ 出荷証明書と税金の支払い kp.300×出荷本数	150,000	伐採者の負担	150,000
	* 村と森林事務所との往復ガソリン代	10,000	10,000	10,000
	⑥ 国境警備隊への通航手数料	50,000	50,000	50,000
	⑦ 船着場での手数料	10,000	10,000	10,000
	* エンジン用ガソリン代	100,000	100,000	100,000
	* 移動中の食事代など	30,000	30,000	30,000
	支出合計	375,000	625,000	775,000
竹の売り上げと支出の差額（儲け）		125,000	-125,000	225,000

図表－9：竹筏による竹材出荷の支出と収入

位置づけられており、しかも成長年数など関係なく竹が伐採されており、共有林では竹が減り、竹自体もだんだん小さくなってきているという。

(2) 13号線沿道

プーパナン山東側の裾野、ナムスワンからポンホン郡にかけての一带もまた、ピエンチャン市場に対するマイ・パーの供給地⁹となっている。ここでは、ポンホン郡におけるマイ・パーの利用と流通について述べる。

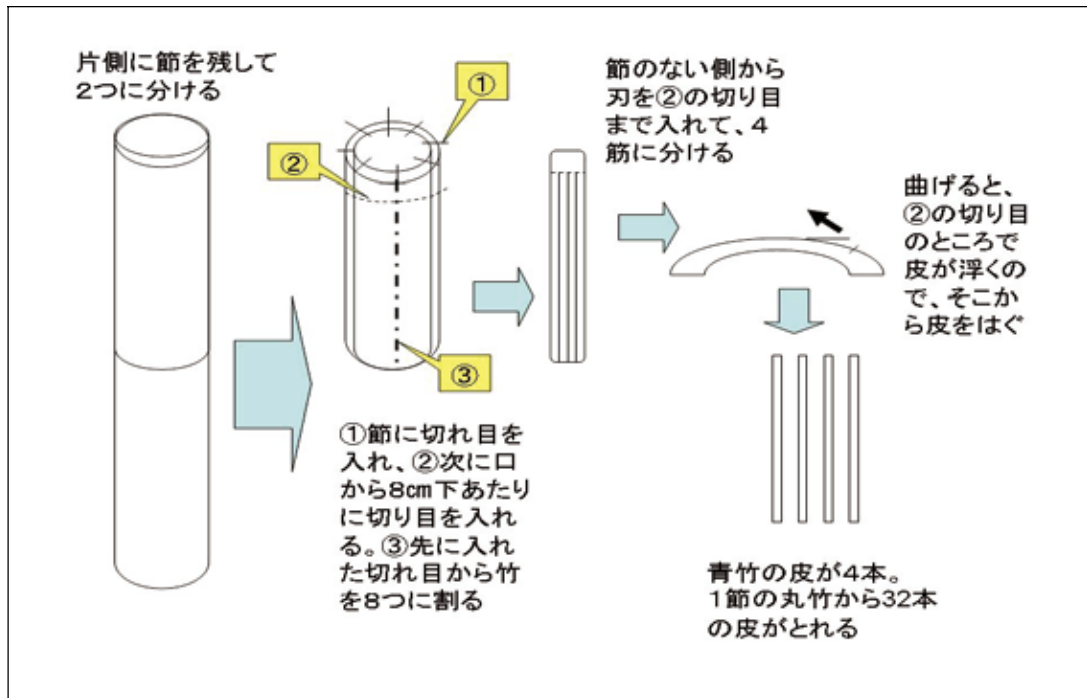
ボンソン村 B.Phone Xong

ボンソン村 B.Phone Xong は、国道 13 号線を北上し、ポンホン村で右折した先にあり、200 戸、1200 人規模の村である。もともと、マイ・パーを使って粉を貯蔵するカゴ（カブ）や野菜入れカゴ（カター）を作り、周辺の村々に供給してきた竹細工の盛んな村だが、2000 年くらいから、ピエンチャン市場向けに、竹製のハンドバック（カテップ）や蒸籠、ティップカオなども作るようになった¹⁰。

ボンソン村での竹製バックや蒸籠、ティップカオ生産は、村の 3 人の女性によって広められたという。この 3 人は、ピエンチャン市内の店をあちこち回って注文をとってくると、村で各家を回り製品の注文をし、できあがった製品を集めて、ピエンチャンに売りにいく。製品作りの注文は個々人で請け負っており、作り手は個人で竹を調達購入し、1 人で加工した竹製品を注文主に買い上げてもらう。売り上げも個人のものとなるため、村では主婦のみならず、十代の子もたちも、注文をとって製品作りに励んでいる状況だ。

9 国道 13 号線沿道では、庭先にニャームンや竹を編んだ垣根（カテ）を積んでいる住居をよく目にする。業者が道々買い集め、ピエンチャンに送られる。

10 ウナギ用、カエル用の釜や家の壁など、自家用のものはマイ・ピアで作っている。



竹製バッグや蒸籠、ティップカオにはマイ・パーの表皮が使われる。村人は各自で2節の丸竹を購入し、以下の手順で丸竹を加工していく。まず、2節の丸竹を、片方に節を残した状態で2つに切り分ける。節側の口に切れ目をいれ、長さを計って節から8cmのところ、竹の皮にぐるりと切り目を入れる。節につけた切り目から刃を入れて竹を8つに割る。八分した割竹は、節のない側から刃を入れ、先につけた皮の切り目まで竹を割っていく。その後、両端をもって折り曲げ、皮の切り目のところから竹皮をはぐ（上図および写真-3を参照）。こうして、剥いだ竹皮のテープをまとめて用意しておき、乾燥しないよう水気を与えつつ編んでいくことで、ハンドバックの本体部分やティップカオをつくる。

カテップというハンドバックの本体は、竹皮のテープを編んだ袋を重ねて二重にしたもので、編むことだけに集中できるなら1日10個（袋20枚）は作れるという。また10個のカテップを作るには、2節の丸竹50本ほどが必要といわれる。言い換えれば、袋1枚を編むのに160本の竹皮テープが使われる計算になる。竹皮をとる場合、2節の丸竹で15本分が1日でできる作業量となり、作り手たちは、竹皮テープの作業、袋を編む作業それぞれをまとめて行っている。現在は、カテップが一番儲かり、一個9000キープで買い上げられ、独身者ならば月に30～40万キープ、小さい子どもがいる主婦で20～30万キープを稼ぐという。つまり、1人で月30個前後を作っていることになり、月で2節の丸竹を150本も消費している計算になる。仮に村で20人近くがカテップ作りに従事しているとすれば、村では月に3000本ものマイ・パーの丸竹を消費していることになる。しかも、製品作りでは表皮だけが用いられるので、皮を剥いだ割り竹はゴミとなる。皮もなく4枚歯に割れた櫛状の割り竹は使い道がなく、打ち捨てられていたが、近隣の村（B. Napoun, B. Phontah, B. Phonmi）の人が、



写真-3：竹皮の用意



写真-4：カテップを編む

ただで持ち帰り、薪の代わりや柵に用いるようになった。

竹製品作りの材料となるマイ・パーは、現在、ワンモー村 B.Vangmon、ナボン村 B.Nabon、サカ村 B. Saka、ノンコン村 B.Nong Khon からトラクターで運ばれてくる。4村からの竹の売り手は、毎回、2節の丸竹の状態で200～300本を運んできて、竹の値段は3本1000キープという。ボンソン村で竹製バッグや蒸籠、ティップカオ作りが始まったころは、村内の共有林の竹を使っていたが、すぐに足りなくなり、個々人でナムグムまで取りに行くようになった。5年ほど前から、他村の人が竹を売りに来るようになったので、竹を買って使うようになった。ナムグムまで竹を取りに行く場合、バイクで湖まで行き、船で島に渡って30本ほどを伐採し、その場で作業して皮だけにして持ち帰るのだという。

竹の伐採地

ボンソン村への竹の供給地は、52キロ村より少し北に位置し、ボンホンから13号線を南下していくと、ワンモー村、ナボン村、サカ村を経て52キロ村に至る。サカ村手前で右折し奥に進むとノンコン村がある。今回の調査では、サカ村とノンコン村で、ボンソン村への竹の販売やマイ・パーの伐採について話を聞くことができた。

まず、13号線の西側に位置するサカ村の場合、ボンソン村での竹の需要を聞き、竹を売り始めたという。住民は自分の田んぼの外れにある私有林でマイ・パーを伐採していたので、すぐになくなり、自家用に使う竹も事欠くようになったので、竹を余所へ売るのはやめてしまったという。

ノンコン村は230戸、1000人規模の村で、ニャーモーという萱葺き屋根作りの盛んなところである。村のなかで3人の男性が、竹を伐採しボンソン村向けに竹材を卸しているという。男たちは、ニャーモーを売るために13号線を北上して村々を回っていたときに、ボンソン村の様子を知り、竹を売りにいくようになったという。

彼らはマイ・パーを、村から20キロほど離れたプーパナン山の山裾にあたる、村の保護林地区までとりにいく¹¹。村の保護林では、焼畑および木材になる大きな木の伐採は禁止されているが、竹や筍の採集には税金もかからず、同村の共有林(Pa Somsai)面積が小さいこともあって、村人なら誰でも、自家用の竹材伐採や筍の採集で保護林を利用できるという。ただ、村から保護林まで距離があること、ニャームンの仕事で忙しいこともあって、村で竹の伐採・販売までをする人は少ない。

保護林に竹を取りに行く場合、子供などをつれ2人で出かける。1年目のマイ・パーを探して伐採するが、その場にて2節の長さに切るまでをする。2節の丸竹をトラクターにのせて村に戻り、数がたまとボンソン村まで売りに行くという。50代の男性は、2006年に入って2ヶ月の間に、すでに5,6回、ボンソン村に竹を送っており、毎回400本以上の竹を運んでいるという。儲けで言えば、ニャームンを家族で作り、ビエンチャンや近郊の村々に売って回ると大差はないが、ニャームンよりも手がかからないという。しかし、最近は1年目の竹も少なくなっており、保護林の奥まで入らなければならず、伐採した竹の運び出しが大変になってきているという。

ビエンチャン市場にとってのマイ・パー供給地も、竹筏にして竹を運ぶサントン郡と、陸路で竹材および竹製品を運んでくるプーパナン山付近の地域とでは、マイ・パーと住民の関係が異なることがわかる。差異の背景には、メコン川の通航と陸路という条件の違いもあるが、伐採し販売する商品としてのマイ・パーの植生分布に加え、村ごとの森林土地利用の区分けとマイ・パー植生分布の重なり方、郡レベルでの森林管理のあり方の違いを考えることができる。マイ・パーは、村によって、公的に管理される資源であったり、保護管理の対象から外れる森林産物、購入すべき材料となり、伐採地サイドそれぞれで、マイ・パーの位置づけには違いがある。それでも、総体としてみれば、竹材として直接に、加工品として間接的に、大量のマイ・パーがビエンチャンに送られ都市部で消費されている現状がわかる。

5. まとめと展望

本報告では、マイ・パーを利用する現場を取り上げ、竹筍の商品連鎖でつながってくる現場それぞれでの、人々と竹との関わりについて述べてきた。マイ・パーを伐採・販売する、あるいは加工生産、製品の販売など、竹を

11 村から5,6キロ離れた場所にある、田圃外れに広がる林でもマイ・パーは取れるが、田圃所有者の私有林となる。私有林の竹は自家用に用いるという。

商品化する営みは、個々の事業者を主体に収益レベルを見れば、どれもが小規模な経済活動ということができる。それぞれが、ある意味で涙ぐましい(しょぼいが、たくましい)小規模な経済活動なのだが、それらの集積で考えれば、都市の需要がいかにかくさんの竹資源を多様なルートと形でもって消費しているかがわかる。

竹を扱う現場を見ると、個人ベースで加工生産が担われている場合から、家族ベースでの取り組み、製品加工の過程で村人同士のゆるやかな分業体制が見られる場合までと、商品化への人々の対応(経済活動の内容と社会関係)も実に多様である。同時に、竹を加工するポンソン村と竹を供給する村の関係や、加工後の屑をめぐるポンソン村と近隣の村の関係、あるいは出身も移転経緯も異なる住人たちの間で技術伝承と分業、ピエンチャンに箴や糸を買いにくる地方の織り手など、地域間、村落間、個人間での、新たな関係も生まれていることがわかる。都市による竹の消費と拡大は、個々のサイトでの人々による対応の多様性そのものを生み出しているといえる。それは、都市 - 農村(地方)および農村 - 農村の関係再編のダイナミズムと言い換えることができる。都市 - 農村の関係の動態は、いくつかの異なる位相の複合全体として捉えていく必要があると考える。

竹箴の商品連鎖から見えてくる、竹を扱う現場間の連関・連動とともに、人々と竹との関わりの多様性や関係再編の動態を、いかにモノグラフとして描き出すのかを、今後の目標としていきたいと考える。

Summary: This report's focus is the commodity chains of bamboo reed; fuum and commoditization of bamboo in Laos. I explore the relationships between people and the bamboo in each production site, which is connected in the commodity chains of bamboo reed, with using mai phai' par (*bambusa arundiana* var. *spinosus* Retz).

The bamboo reeds are made in a suburb of Vientiane city, Nonsavang village. About bamboo reed production in Nonsavang, I examine the contents of activity which each household bears, the circumstances of technical acquisition, etc. and describe the complicated relation of dwellers engaged in production of reeds.

The Reeds made from Nonsavang, are kept by 4 shops in the public market in Vientiane, and sold to the textile producers who come from in Vientiane and several provinces. In the investigation on the enterprise diaries on reeds selling recorded by 2 shops during half a year in August, 2005 to February, 2006, I describe circulation and the demand trend of reeds from Nonsavang.

The conditions of wholesalers bamboo, or the situation of bamboo dealing in Vientiane, circulation of bamboo and the situation of the felling ground of the bamboo is summarized are told us that each business which commercializes the bamboo can be called a small-scale economic activities. On the other hand, if they are accumulated and it thinks as a whole, it is turned out how the city received and consumes many bamboos by various routes. The consumption of a bamboo in the city and the expansion of market have produced the diversity of correspondence by people in each site itself.

資料-1:ノンサヴァンにおける蔑作りの関係者リスト

No.	住居地区番号	作業内容	作業に関わっている人数(世帯構成員数)	現状(商売相手など)	職業(退職前)	出身地		付記	ノンサヴァンへの移入時期	技術の習得
						夫の出身地	妻の出身地			
1	3	蔑 ソウゴウ	5(7)	T-1へ	(仏大使館警備員)	地元(隣村 Houakhoua)	Savannakhet	No.40の妻とキョウダイ	1990年代には親家族で移入	70年代にNo.3より
2	5	蔑 ソウゴウ				地元(Nonkho?)		すでに転出	1990年代に親家族で移入	70年代にNo.3より
3	5	(蔑) ソウゴウ		やっていない		タイ(コンケン)		蔑作りを伝える(1987年死去)	1970年代に移入(Vatnar, Saphangmoを経て)	
4	5	蔑 ソウゴウ	2(3)	T-1へ	(軍人)	Savannakhet(1966年にビエンチャン)	地元(隣村 Houakhoua)	妻がNo.1とキョウダイ	妻が1950年代に親家族で移入(結婚後は隣村 Houakhoua にいて、その後、ノンサヴァンへ)	82年(軍を除隊後)にNo.3より
5	5	蔑 ソウゴウ	?(9)							80年代にNo.4
6	8	ソウゴウ	?(9)							
7	9	蔑 ソウゴウ	5(8)	K-1, T-2へ、サムヌア市場からの電話注文	(軍人、教員)	Huapan	Luangprabang	No.8の親	1994.5年ころ移入(1976年ころからビエンチャン。B.Non San Tohより、99年ころに徴編みをNo.15の息子より)	
8	9	蔑 ソウゴウ	2(7)	T-2, K-1へ、ヴァンピエン市場、本村はNo.51に頼む	運転手、時計修理	Pakxan(チャンバサク出身で軍人の父親について、PakxanからViangxay, Xamu nuaを経てビエンチャンに移動)	ビエンチャン	No.7の娘家族	1992年より移入(結婚後、B.Phon SaatにてNo.7家族と同居、ノンサヴァンに移り05年より独立)	蔑作りはNo.7より
9	9	蔑 ソウゴウ	3(4)	T-1, T-2, K-1へ	教育省	Xiang Khouang, B.Viangkham	地元(隣村 Houakhoua?)	No.18の嫁夫婦	1997年より現在の家	No.18より
10	9	(蔑) ソウゴウ	?(6)	蔑作りはやめた						No.6の息子より
11	9	ソウゴウ	2(3)		警備員	Ban Keun	Savannakhet		1998年に移入(ガンターより)	
12	9	蔑 ソウゴウ	3(6)	T-1へ、サムヌアの市場、シュエンクワンへ送付、ソウゴウはNo.29に依頼		元夫(Vangvieng)	B. Phonsaat, Khamthabuly, Savannakhet		1985年ころ移入	もともとできたが、87年ころ元夫もはじめる。No.17に雇われた
13	9	ソウゴウ	3(6)			?	Louang Phabang		1990年ころ移入	
14	9	蔑 ソウゴウ	1(6)	削った羽はNo.12の他に、近所の人が買っている		B. Saphantai, Khamthabuly, Savannakhet	B. Phonsaat, Khamthabuly, Savannakhet	No.12の嫁夫妻	2002年ころ移入	02年ころよりNo.12の息子より
15	9	ソウゴウ	4(5)	蔑作りはやめた	警備員、車修理		Pakxe		1985年ころ移入	
16	10	(蔑) ソウゴウ	?(9)							
17	10	蔑 ソウゴウ	1(6)	あまりやってない(外国人から)	米大使館警備	B.Done loun, Xaithani	B.Donpalep	Saravani出身の父親が教員として母親の村B.Done lounへ	1977年に親家族で移入	70年代にNo.3より
18	11	蔑 ソウゴウ	?(5)			地元(隣村 Houakhoua?)	?		1950~60年代に移入	80年代以降にNo.2より
19	12	蔑(蔑羽織りのみ) ソウゴウ	5(9)	No.7やNo.21が頼みに来る	(警備員)	Viang Thong, Huapan	Viang Thong, Huapan	子供が軍関係	1994.5年ころに移入(1970年代にはB.Vieng Keo, Thalat, 1989年よりビエンチャン)	9.2年ころからNo.50や、No.12の元夫などから
20	13	ソウゴウ	3(6)	T-1, T-2, T-3, K-1へ		死亡	Pakxan		1991年より移入	No.30より

21	13	箄 (箄羽削りのみ)	ソウコウ	箄	5(8)	削った羽はNo.19へ。2005年からステンレス製のソウコウ中心(T-1、K-1、木枠はNo.9から調達)	大工、建築	Xam Nua	Xiang Khouang		1983年ころ移入 (Vang Vieng, Phonghongを経て)	90年代にNo.2や、No.12の元夫より
22	13		ソウコウ		3(7)		銀行	地元 (隣村 Houakhoua?)	Pakxan	No.18の息子夫婦	2000年ころに現在の場所へ	1998年ころより、No.18より
23	13		ソウコウ		3(4)	No.9のところで作業など		?	地元 (隣村 Houakhoua?)	No.18の娘夫婦		No.18より
24	13	箄	ソウコウ	木枠・製材機	4(7)	T-1、T-2へ、サムヌアからの注文、ステンレス製の木枠製作	(軍人、会計士、村長、障害者事業組合)	Louang Phabang	Louang Phabang	革命前にHuapao県で郡長、革命後は教育者の役人だった父親が土地を購入	1984年より移入 (ピエンチャン市内のmikxayより父所有の土地へ)	No.18より (No.18の息子が娘と結婚)。2001年には障害者組合として就労業者組織
25	13		ソウコウ		1(3)	K-1へ、木枠はNo.9から調達	建築	市内ノンボン村	Thalat (1980年に結婚してノンサヴァンへ)	No.24と異母兄弟	1989年ころ親戚家族で移入 (父所有の土地)、2005年に新居	No.12の元夫から
26	13		ソウコウ		3(6)	T-1、K-1へ、木枠はNo.9から調達	農業	Louang Phabang	Louang Phabang	12組に妻の両親	1986年より移入	
27	13		ソウコウ		3(5)	T-1、K-1へ、木枠はNo.9から調達	(ホテル)	Pakxan	Vangvieng		1984年ころ移入 (None Duangなどを経て)	No.30より
28	14	箄	ソウコウ		3(7)	T-1、K-1へ、木枠はNo.9から調達		?	Pakxan	No.50の姪、No.33、No.44、No.43、No.45の母親		No.18より
29	14		ソウコウ		1(4)	ステンレス製箄用のソウコウのみ	運転手<教育省、現在Kolao>	Pakxe	Muang Khong	No.30の姉の夫の兄弟の息子	1980年代に移入 (1982年にピエンチャンへ)	95年よりNo.12から
30	14	箄	ソウコウ		4(7)	最初はT-1、5年前からT-2へ。木枠はNo.51より	(教員、公務員<サウニ郡>)	(Ban Keun)	Boikhamxai		1950~60年代に親戚家族で移入 (農村森林局に勤めていた父親についてBan Keunの親指所、That Luangを経て、橋の工事の関係で)。	95年ころよりNo.3の息子より
31	14		ソウコウ		1(6)							
32	14		ソウコウ		?				Savannakhet			
33	14/28	(箄)	ソウコウ		2(5)	T-2へ。箄作りは2002年まで		Pakxan	Savannakhet	No.28の息子家族	1970年代に親戚家族で移入	92、3年ころNo.4より
34	17		ソウコウ		?(7)						Xaignaboulliに転出移転	
35	17		ソウコウ		?(12)	No.30へ			Xam Nua			
36	17		ソウコウ		?(8)	No.30へ			Pakxa	No.38と姉妹		
37	17		ソウコウ		?(6)	No.30へ			Xam Nua			
38	17		ソウコウ		?				Pakxe	No.36と姉妹		
39	17		ソウコウ		?				地元			
40	18	(箄)	ソウコウ		?(5)				Vangvieng			
41	19		ソウコウ		?(5)							
42	19		ソウコウ		?				ピエンチャン			
43	20		ソウコウ		?				地元	No.28の娘家族		
44	20	箄	ソウコウ		?				地元	No.28の息子家族		
45	20		ソウコウ		?				地元	No.28の娘家族		
46	20		ソウコウ		2(7)	No.30へ	(軍人)	Xam Nua	Xam Nua		1981年より移入 (土砂工事のため赴任)	94年より、No.30より注文
47	21	箄	ソウコウ		?(13)							
48	23	(箄)	ソウコウ		?(6)	箄作りはやめた			Pakxan	No.50の妹夫婦	1980年代に移入	No.50より
49	24		ソウコウ		?(7)	高輪であまりやらない						
50	25	箄	ソウコウ		2(5)	箄は息子が自家用のみ			Pakxan		1980~60年代に移入	70年代にNo.3より
51	27	(箄)	ソウコウ	木枠・製材機	1(6)	箄作りはやってない	大工、建築	Louang Phabang	Phonsavan、Xiang Khouang		1987、8年に移入	2000年ころから、まわりから頼まれて
52	28	(箄)	ソウコウ		1(3)	箄作りはやってない		Pakxan			1980年代に移入?	70年代にNo.3より

資料－2：市場における箬の売り上げ

K-1 ステンレス製箬

箬の行方	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計	箬の種類
Xieng khuang	64	14	3	14	1	54	44	194	11
Vang vieng			1				1	2	2
Vientiane	39	27	29	28	106	90	87	406	32
Lak sao			2					2	2
Thakhek				1				1	1
Pakse	11	16	1	5	4	8	12	57	4
計	114	57	36	48	111	152	144	662	

K-1 竹製箬

箬の行方	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計	箬の種類
Phongsaly			4	3				7	1
Oudomxai	2		2	2	4			10	2
Xam Nua						1		1	1
Xieng khuang	14	21	9	3	4	40	1	92	14
Luang Phabang	44		5	3		17	43	112	4
Vang vieng				1				1	1
Vientiane	9	24	15	17	30	13	11	119	25
Lak sao		15						15	4
Thakhek	1							1	1
計	54	39	20	21	30	30	54	358	

T-1 ステンレス製箬

箬の行方	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計	箬の種類
Xam Nua			3	6	2	5		16	7
Xieng Khuang				2		2	4	8	3
Luang Phabag							1	1	1
Vientiane	10		4	7	17	19	5	62	16
Thakhek							1	1	1
Pakse				2	6			8	3
計	10		4	9	23	19	7	96	

T-1 竹製箬

箬の行方	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計	箬の種類
Bokeo		1						1	1
Phong saly			8					8	2
Luang Nam Tha	1					4		5	2
Xam Nua	26	2	3	15	1	10	9	66	17
Xieng Khuang		2	9	3	1	9	14	38	11
Luang Phabag			14	2	2			18	7
Vientiane	12	4	22	9	15	34	9	105	26
Lak sao	2	51	5					58	4
Thakhek							2	2	2
Pakxong	5	16		4	2			27	7
Pakse	6	5	13	1	4			29	13
外国			4	5				9	5
計	52	81	74	34	25	57	34	366	

資料3: ビエンチャンの竹市場

竹の種類	加工品	ターゲット (1)	ターゲット (2)	ITEC	5km	ドンパレ (1)	ドンパレ (2)	ドンパレ (3)	トンボン	ハティエン (1)	ハティエン (2)	9Km	アケン ター	ダンカン	ダンカン、ノ ンター
マイ・パーン Mai phai' par	未加工(竹材)	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
	垣根(カテ)	○	○		●	○	○	○		○		○			○
	床の底敷	○	○			○	○	○		○		○	○		
	屋根(テ・ムン・ファン)	○	○			○	○					○			
	すだれ(カンデット)		○												
ヒア Mai hia	籾貯蔵用巨大カゴ (ヒン)	○													
	ゴミカゴ(ケン)	●	●												○
	傘	●													
	魚入れ(タン・カイ)		○								○				
	未加工(竹材)	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
	垣根(カテ)	○							○						
	屋根(テ・ムン・ファン)	○										○			
	壁(フアー)	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		
	すだれ(カンデット)			○											
	ニワトリカゴ(スンカイ)	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
サンパイ Mai samng phai' チン	揺りカゴ(ウー)	○	○												
	鳥の巢(ハンカイ)	○								○					
	ベッドすのこ		○						●						
	未加工(竹材)	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎			◎		
	ハシゴ(カンダイ)	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎	◎				
Mai phai' barn (ソット) Mai xort	未加工(竹材)		○												
	ハンモック(ペーノン)		○												
	釜(サイ)	●	●												
	ホウキ	●	●												
その他	釣竿	●	●												
	ハシゴ	●	●												
	竹の紐	●	●												
菅(ニヤームン)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

注記: ◎は竹棹で販売、○はその場で加工も行っているもの、●は別なところから仕入れられているものを意味する

ビエンチャン市場で売られる箬

